

NEW HOUSING JOURNAL

VOL57

8
AUGUST

2013

新 住宅
ジャーナル



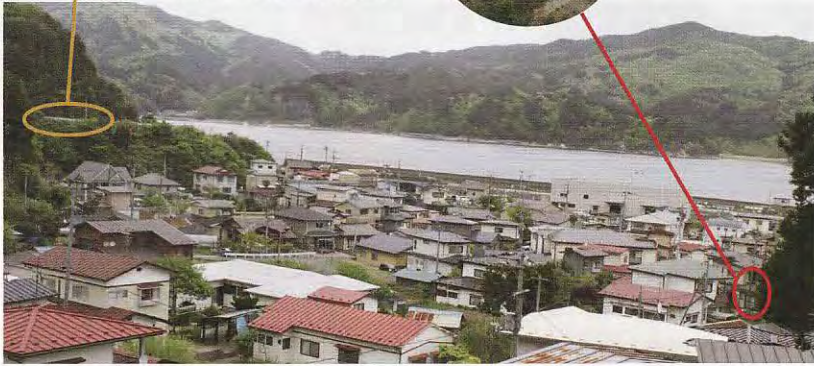
人気上昇中 ヴィンテージ建材



宮古市高浜仮設住宅



復興ドーム設営地



宮古市河南地区高浜

DATA

プロジェクト名	DIY復興ドームプロジェクト
設営所在地	岩手県宮古市高浜
用途	倉庫
企画・主催	復興支援ボランティア白樺隊
棟数	2棟
工期	1日(5月25日7:00~17:30)
広さ	間口・奥行2間/8帖(約13㎡)
参考価格	約20万円/棟(材料・交通費等)
参加者	㈱園部建築事務所など計5社20名

復興支援白樺隊の一行 前列中央の3名が支援を受けた地元漁師



DIY復興ドームで被災地支援 建築業界に広がる草の根支援の輪

東日本大震災で被害を受けた岩手県では発生から3年を経た今も支援が続けられている。5月22日には岩手県宮古市で計20名のボランティアによってDIY復興ドームを2棟建設。続く5月26日には岩手県山田町に31名のボランティアによって6棟を建設。今まで白樺隊では休暇や仕事の合間を利用した復興ボランティアの支援により合計18棟の復興ドームを建設している。

DIY復興ドームとは、ロシア白樺耐水合板の強度・耐久性を活用したドームテント状の建設物。材料はロシア白樺耐水合板と角材など。木工事ならではのプランの自由度があり、作り手が建具等の仕様をアレンジできる。材料費は1棟あたり約20万円。ドーム提供と現地コーディネートは復興支援ボランティア白樺隊(兵庫県神戸市木村哲哉代表)。施工は設計事務所の所員・学生(千葉工大)・被災者らによるボランティア。現場経験の豊富な建築士がリードした。

支援のいきさつについて、所員5名をはじめ計15名で駆けつけた園部建築士事務所聞いた。復興支援のきっかけは、同社研究室代表として構造設計をリードしてきた、園部泰寿代表(筑波大学名誉教授)が亡くなり、遺族より義援金を託されたこと、更に同社は昭和39年~40年代、東北地方で多くの



宮古名産「すき昆布」の製造。軽トラックで海から運んできた昆布を釜で茹でて乾燥。近隣同士で助け合って作業する



AM 8:00

大引3本(4m 90角)と根太9本を並べる



床パネルは12mm厚のシハチ版6枚



AM 8:31

シハチ6.5mm厚を3枚並べて角材を敷きビス留め



3つを合わせて角材をつなげ防水テープ処理



AM 10:55

コンパネ端部を上にはりつけ保護塗料を塗って立ち上げ



足元を固定してドーム立ち上げに成功



強風対策でアンカーボルトを打ち込む（アレンジ仕様）



流木丸太をのみ加工し大引の端に載せる（アレンジ仕様）



ドア枠を作る 蝶番を取り付けストライクを加工する



型取りした妻壁パネルをはってドア枠取り付け



アクリル樹脂板とベニアで窓ユニット（アレンジ仕様）



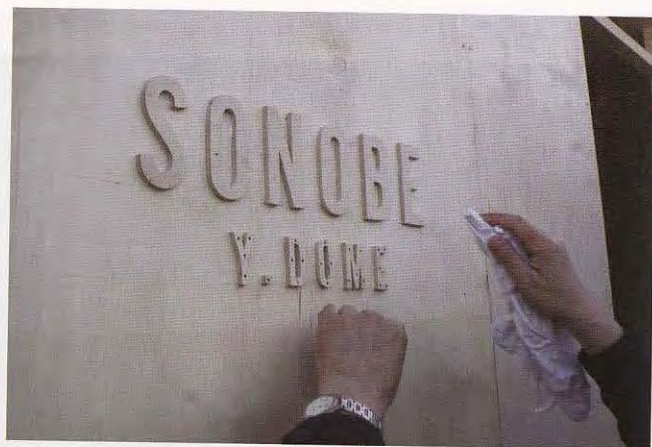
小窓をとりつけて妻壁の隙間を止水処理

漁業施設を手掛け大変お世話になったことにより同社創立記念日の事業として直接支援として、復興支援白樺隊と、東京より資材と共に宮古に向かった。復興ドームを設置したのは河南地区高浜。主に漁具の倉庫として利用される。高浜では津波のため35戸が流出、全壊75戸、大規模半壊64戸、52戸が半壊。計247戸が建物被害を受けた。住民の多くは高台に避難したものの5名が亡くなり、住戸を失った被災者のために高台に44戸の仮設住宅が建てられた。沿岸漁業はカキ・ワカメの養殖が特産。カキは真水を嫌うことから室内でむき身にしなければならない。すき昆布の加工はそれぞれの家で行われているが、用具の置き場所は、津波の時に埠頭から流れてきた丸太の流木で全壊。震災から2年を経た現在、住戸は補修や建て直しが進み、漁協レベルまでは行政の支援が届いているが、その他の作業場には及んでいない。

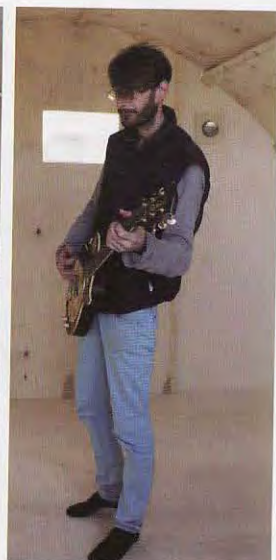
漁師の前川さんによると、近所に住む元校長先生が新聞に掲載されていたDIY復興ドームの記事を見かけてメールで問い合わせしてくれたことで支援につながったという。「こんな立派なものを建ててくださったのもインターネットで通信ができた先生のおかげです」



日暮れ前に完成した 換気口と流木丸太が見える



ネームプレートをとりつける (アレンジ仕様)



隣りの家の小学生も様子を見にきて記念撮影
完成を祝ってミュージシャンのカルロスが演奏
当日、園部建築事務所関係者ら14名が宿泊した

